海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間:2020/08/24　～2020/09/30)

１．　勉学の状況

今回のパンデミックの影響で、残念ながら予定通り渡航することはできませんでした。バスク州立大学は"face-to-face"に重きを置いているため、本来履修予定の建築学部の授業に参加することはかないませんでした（留学生もほとんどが欧州からの学生のため、救済措置もなし）。語学コースのみはオンラインで提供されていますが、特に学びたかったバスク語に関しては一部対面が要求されたため履修を取りやめざるを得ず、最終的には秋学期開始前のスペイン語集中講義（2週間）と秋学期の留学生向けのスペイン語コース（週２）のみの履修となりました。スペイン語集中講義を受ける前にまずオンラインでのレベル分けテスト（筆記試験＋口頭試験）がありました。今までスペイン語を勉強していた甲斐もあり、テストの出来は想定より良く、Intermediateクラスへ振り分けられました。ただ、授業がスペイン語のみを用いてスペイン語を指導する形式だった（スペイン語を英語で指導するものだと思っていた）ので、現地にいるわけでもなく（現地にいれば言語能力をはるかに鍛えやすい）、リスニング能力にやや不安を感じていた私は復習の意味合いも兼ねて一個下のBeginnerクラスに相談して振り分けなおしていただきました。話す・聞く能力に特化していた授業で、スペイン文化の多くも学び、受講前より力をつけられたと思います。また、日本人は珍しいからか、先生やほかの受講生によく日本について質問をされます。あまり自分が日本について理解できていないことを実感したため、もう少し日本文化についても説明できるよう、勉強しなおそうと思います。集中講義の際は、先生に対する学生数（ST比）も少なく、非常に満足のいく2週間の授業でした。その後の秋学期の授業では全体的に授業時間は減り、ST比も２、３倍程度高まってしまい、また担当の先生も変わりましたが、日本が好きらしく、私のことを気にかけてくれて個人的には助かっています。建築学部の科目の履修登録は事前に済ませていたため、e-gela(バスク州立大学のMoodle)にて一部の講義資料の閲覧はできます。講義資料だけを見つめても正直わからないことだらけではありますが、春学期に渡航できた時のためにも最低限やれることは今後もしていこうと思います。

２．生活の状況

秋学期開始前の双方向型のスペイン語集中講義（8月24日から9月4日の平日）が日本時間の21時から26時まであり、尚且つ予習復習（宿題含む）もする必要があった為、この期間は毎日6時頃に寝て、15時頃に起きるという昼夜逆転生活をしていました。幸いにもこのパンデミック下で外に出かける用事もほとんどなかったため（土曜日の夜の家庭教師のバイトのみ）、あまり他者にご迷惑をかけることなく生活していました。この集中講義が終わり、秋学期開始後は、受講できるクラスが週2（月水）のスペイン語コース（20時半から22時半）のみとなりました。時間的余裕ができたこともあり、これに加えて弊学部内で掲示されていたヨーク大学（イギリス）の双方向型プログラムの受講、いわゆるオンライン留学を派遣留学とは別にしていました（9月25日にて修了）。こちらは日本時間の17時から20時半まで（火金のみ22時まで）授業があったので、これに伴い少しずつ生活リズムを日本時間に合わせようとしましたが、課題の影響もあり、なかなか調整できておらず、今でも深夜から早朝の間に寝て午後に起きる生活が続いてしまっています。また、イギリスとスペインには実は時差が1時間ほど存在しており、バスク州立大学の授業等ではスペイン時間、ヨーク大学のプログラムではイギリス時間、そしてヨーク大学のプログラムの事前事後学習・プログラム内での日本人大学生同士のグループワークの約束・その他日本での用事約束等では日本時間と、それぞれの時差（時間帯）を考慮する必要があり、非常に混乱していました（何度か時差計算を誤り、本当に大変でした）。10月からはイギリスの時差のことは（趣味のサッカー観戦のことを除けば）考慮する必要がなくなるため、混乱は減りそうです。そして、バスク大学の授業の履修状況的に、千葉大学の後期科目の履修をすることに決め、後期からは双方向型授業も展開されるので、もう少し生活リズムを整えていきます。ただ、急激な生活リズムの変更は身体に大きな負荷をかけてしまうこともここ2か月で改めてわかったので、同時に自分自身の身体のことも気にかけていきたいです。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間:2020/10/01　～2021/02/18)

１．　勉学の状況

まず、1月で終わった秋学期についてです。今回、派遣先である建築学部の授業は全て最後までface-to-faceでの実施であったため、オンラインで開講されていた語学（スペイン語）の授業のみを結局履修していました。私以外の履修生は皆現地に留学できた上で履修しているため、時間がたてばたつほど、彼ら/彼女らが（コロナ禍といえども）現地での生活を通してスペイン語のレベルが自然と上がってきているように感じられたのは非常に辛いところではありました。かと言って、私は千葉大学の授業も履修上限緩和分も含め履修していたので、正直なところ、千葉大学の授業で手一杯であまり語学のためだけに勉強時間を割くことが出来ませんでした。秋学期の通常授業のテスト期間は1月上旬からなのですが、語学の授業だけは12月中旬にありました。何とか最低限のレベルはクリアしましたが、複雑な気持ちです。1月下旬から今度は春学期が始まり、スペイン国内の状況が秋学期当初よりも感染者数で見ると遥かに悪化していたので、建築学部の授業のオンライン化に期待をしていましたが、結局face-to-faceでの実施となってしまいました。ただし、語学に関しては引き続きオンラインでの開講となり、春学期からはスペイン語に加えて現地語であるバスク語の授業もいよいよ始まりました（どちらも週2, 1コマ2時間, GoToMeetingもしくはZoom上）。前者は授業レベルが一段階上がり（CEFR B1相当）、一層の努力が求められるようになりました。また、秋学期同じスペイン語の授業を履修していた現地の留学生の唯一の友達が半期での留学だったために帰国してしまい、また孤独になってしまいました。後者はまさかの完全にスペイン語での授業でした（シラバスが英語だったため、てっきり英語でバスク語を学べるものだと思っていました…）。そのため、履修生も現地の正規学生などが多く、大方スペイン語（カスティーリャ語）話者で、「スペイン語の授業よりバスク語の授業でのスペイン語の方が難しいのでは…」と絶望的に感じたり、教科書も当然買えず先生の送ってくれる（スマホで撮ったやや粗めの）画像を見ながら勉強したりしているので、困難は非常に多いです。1月下旬から2月上旬にかけては千葉大学の学期末と重なっており、オンラインでの留学を始めて以来一番忙しかったです（T4よりもT5の方がテスト・レポートが多く、全体的に質が疎かにならざるを得なかったので成績開示が恐怖でたまりません）。千葉大学の授業が完全に終わった今、やっと余裕が少し生まれてきたので、これからはもう少しスペインの語学のためにも勉強時間を割けるように頑張っていきたいと思います。

２．生活の状況

結論から述べると、千葉大学の授業が始まってからも昼夜逆転は治りませんでした。昼夜逆転を是正せざるを得ない授業形態・時間帯の授業が実質的になく、授業含め午前中に予定がある場合は睡眠時間をその日だけ削るようにしていました。昼夜逆転の数少ないメリットはスペインの授業中"は"眠くならない点、現地の友達と時間を気にせずSNSで会話ができる点、渡航できたときに時差ボケを感じなくて済む点です。風邪にもコロナにも一切かかっていませんが、それでも身体に負担がかかっているように感じることはありますし、相対的にデメリットが多いように思うので、一切推奨する気はないです。（実は何度か是正を試みたのですが、結局三日坊主になってしまっています。）来年度は千葉大学で一定数対面授業があるようなので、それまでには是正する予定です。

最後に、今後バスク州立大学に現地での派遣留学を行うことを検討している方々のために大学含めいくつか現地の友達を通して送ってもらったDonostia-San Sebastianの写真をご紹介します。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間:2021/02/19　～2021/07/09)

１．勉学の状況

2月から3月にかけて再びスペインにおける感染状況が悪化し、渡航が非現実的になったため、春学期も語学コースのみの履修となりました。春学期からは、スペイン語に加えて、バスク語の授業も始まりました。スペイン語は中級コース（Intermidiate, CEFR: B1）に昇格して、授業レベルが高まると同時に、担当教員や受講学生もがらりと変わりました。レベルが上がったことで、自分が渡航して言語を実用的に話せていないことによる他受講生（皆スペイン在住）との進捗度の差が秋学期よりも顕著になっていきました。残念なことに、秋学期スペイン語のクラスで仲良くしていた留学生の友達が半期留学だったために、授業の相談等が気軽にできる子がいなくなってしまったことも心理的に辛かったです。しかしながら、何とか先生の助け舟を得ながら、最終的にCEFR: B1の証明書を単位取得と同時にいただき、この留学の意義を定量的に示せるような成果を得られたことには満足しています。バスク語の授業に関しては、とにかく受講前の想像とのギャップが大きかったです。スペイン語のコースの際もそうでしたが、シラバスは全部英語で書かれており、英語でご指導いただけるものだと思っていたら、スペイン語での指導で、これが本当に大変でした（正直スペイン語のコースよりもスペイン語のレベルが高かったです…）。さらに、受講生が留学生に限らず、正規学生（非バスク語圏出身）も多く、ほとんどの学生がスペイン語を非常に流暢に話せていました。そのため、授業内でバスク語をスペイン語に訳されるのですが、そこでわからなければ英語に自分で調べて訳しなおし、その英訳がわからなかったりすると、そこからさらに日本語訳を調べて考えるという、1つの授業内で4言語を使って頭をフル回転させて考えるハードワークをこなしていました。幸いにも、私は日本でバスク語を多少勉強していたこともあり、何とか最後までついていくことができていた、はずです。というのも、中間テストの筆記・スピーキングテスト、期末テストの筆記テストをこなし、これで単位が取得できたと思ったのですが、まさかの期末テストのスピーキングテストの日程を把握しきれておらず受験できずに落単してしまったのです。最後の最後に自分のスペイン語のリスニング能力不足で落単という、無念な結果に終わってしまいましたが、日本ではなかなか学べない分野であり、その言語を学ぶのに最も適した環境で学べたことは本当に貴重だったと思います。オンライン留学になってしまったことでの不満は、正直なところ、数えきれないほどありますが、オンラインだからと言ってこの留学を辞退したり、学ぶことから逃げずに最後まで取り組めたことは間違いなく自分にとってプラスになりました。

２．生活の状況

千葉大学3年前期が始まってからは対面授業が増えたこともあり、大学に平日は高頻度で通学していたため、実家暮らしで通学に時間がかかったこともあり、秋学期と比較すると、比較的規則正しい生活に戻っていきました（戻さざるを得ない状況でした）。オンライン留学における様々なストレスも、千葉大学で久しぶりに友達と会って会話をすることでストレス発散に繋げられていました。また、千葉大学の留学生のチューターもオンライン上で行っていたのですが、その学生はドイツ在住で、スペインと時差が同じであったこともあり、オンライン留学について話すときのネタにもなったので、ある意味良かったのではと思えました。総合的に、この一年間のオンライン留学を通してストレス耐性を身に着けることができました。これは良くも悪くもオンライン留学ならでは、と言えるかもしれません。留学期間終了直前にはバスク州立大学の友達らとテレビ電話をつなぎ、現地の実際の状況についてもお話ししました。どうやらかなりコロナ以前の日常が戻ってきているようなので、近い将来、今度こそ実際に渡航して、現地の生活を肌身で感じられたらと思います。